
死と隣り合わせの…

燐光蘭歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死と隣り合わせの…

【NZコード】

N4174G

【作者名】

燐汎蘭歌

【あらすじ】

銀誓館学園に通う『能力者』の4人。ゴースト退治のために行くことになつたのは、銀魂の世界！？異世界で起こつたことに疑問を感じるもののいつも通り退治へと向かう。けれど、それはこれから起ころる悲劇の始まりに過ぎず…。銀魂、シルバーレイン、そしてあるゲームのどたばた二次小説です。シルバーレインは実際のゲームからかなり外れたところを走ると思います。設定等の同じ別物と考えてください。また、極度の似非キャラが大勢居るかと思いますのでお気をつけください。

プロローグ（シルバー・レイン側）（前書き）

シルバー・レインについてですが、トミー・ウォーカー社運営のPBW（プレイバイウェブ）です。

詳しいことは『<http://t-walker.jp/sr/>』へ。

同じ（ような）名前の生徒が実際のゲームに居ても、プレイヤーは私ですので…

プロローグ（シルバーレイン側）

放課後の教室。そこに居るのは4人の能力者と1人の運命予報士。呼び出し申し訳ない。実は此処とは全く違った場所で、ゴーストが連続で現れるんだ。

と運命予報士はそう切り出した。

「君たちにはとある漫画の世界で、ゴースト退治をしてきてほしいんだ。暫くその世界に滞在して貢う事になると想うけど」

そこまで予報士が言ったとき漆黒の髪の少年が手を上げ

「質問。どうやってそこへ行くんだ？ 漫画の世界に行くことはできません不可能だと思つけど」

そう聞いた。

「それについては気にしなくても大丈夫。シルバーレインによつて生み出された特殊なトンネルが現れていてね。ちょうど『奈森キャンパスの屋上なんだ。ちなみにそれを見つけたのは屋上に居る確率の高い彼だよ。学園のほうが色々と手を打つて君たちの行く場所のトップとも話をつけたそうだよ。世界結界については気にしなくても平気だ。向こには世界結界で守られていること以上のこともあるみたいだから』

そういうと、予報士は一冊の漫画をすっと机の上においた。
4人の少年少女が身を乗り出し覗き込む。

「あ、これ、雪兔のおにーちゃんが読んでた」

「私も。前に読んだよ。アニメも見た」とある

雪のよひに白い髪の少年と白銀の髪の少女がそつまつた。

「おー！ 人さんは？」

「持つてるよ。単行本全部」

「前に読んだ覚えがある」

先ほど質問をした少年と、黒髪の少女もそう答えた。

「なら、これについての説明は不要だね。僕からの説明は以上だよ」

「ちよ、ちよっと待ったー！ ゴーストの特徴とか聞いてねえぞー！」

「あーーーめん。忘れてたー！」

黒髪の少女に言われ、しまつたと天を仰ぐ予報士

「忘れないでよう

田を見開いて白い髪の少年が言った

「『めん』めん。行つてすぐ、君たちが倒さなければいけないのは
リリストだよ。でも、それで終わりじゃないんだ。さつき言つた様に、
まだまだ居るだろ？ から。それについては、なんともいえない

「その後はどうなるの？」

「一応、対策としてこれ。学園と向こうとで作ったものらしいんだけど。こっちとあっちで通信が出来るらしいよ。三方原君、持つていてくれる？」

「了解」

投げられた携帯のようなものを漆黒の髪の少年はキャッチした。

「リリスについては夜、繁華街で客引きのふりをして呼び止めた人を脇道に連れ込むみたい。それと、能力者の居る方向が大体わかるから気をつけて。」

4人がいっせいに頷く。

それを見て、予報士は一度にこりと笑った後、すぐに表情を引き締める。

「じゃ、ほんとにこれで以上だよ。行つてらっしゃい。気をつけて。
無事に戻つてくる」とを祈つてゐるから

「行つてきまーす」

「いっつてきまーす」

無言で教室を出て行く、黒髪の少年と少女。にこりと笑いそつとつてから教室を出る白銀の髪の少女と白い髪の少年。

死と隣り合わせの青春を

プロローグ（シルバーレイン側）（後書き）

今後登場予定のシルバーレインの面々（自キャラを基にしたオリジナル）の設定は

<http://mononararetu.web.fc2.co>
m/sr/tonari.htm

にまとめてあります。

プロローグ（銀魂側）（前書き）

むしろ、真選組側ですね。
どうも、口調が怪しいです。
もう少し勉強しなければ：
つか、沖田の口調は難しい

プロローグ（銀魂側）

「これは酷いな」

江戸かぶき町。夜になるとござやかになる繁華街から少し離れたところに出動した真選組隊士たちは顔をしかめた。

彼らの前には衣服の切れ端と片方だけの靴。そして大きな赤い水溜り。

「また死体がありやせんぜ。こんなだけの出血、まあ生きてこる訳無いでさア」

「これで3件目か。全く何が起つてやがるんだ？」

その場に居る真選組隊士の中でもっとも若年と思われる青年が言えば、タバコを加えたままの男はそう返した。

と、パートカーの中の無線がなる。一人の隊士が無線に出るため、パートカーへと向かう。

その間、ほかの隊士は周囲に少しでも証拠が無いか探している。

「副長、代わってくれって局長から」

「あん？…なんすか？近藤さん」

どうやら、タバコを加えた男がこの中では一番上の地位に当たるらしい。確かに、彼と若年の青年だけは制服が違う。

『用件の前にひとつ聞きたいんだが、またか？』

「ええ。また大きな血溜りはあるが死体が無いってやつですよ」

『さうか。悪いがすぐに戻つてくれ。それに関連する事を松平のひとつアんから聞いたんでな』

「わかりました。」いつもほかに何も出て来やつも無いんで、引き上げます

『悪いな』

「下へ上げですかイ?」

副長と呼ばれた男が無線をあると青年が倒れこり、やつ聞いた。

「ああ。話があるひしー」

「ふーん。…全員引き上げー…ひとつと戻るぞ」

青年が声をかければ、隊士が撤収の準備を始める。

彼らがその場から撤収し、詰め所に戻りその内の一室に集まつたのはそれから一時間後だつた。

「…と言つわけで、どうやら今回のことには『人外』のものが関わつてゐるらしい。それで、全く別の次元に住む人間がそれに対応すると言つてきているのでそいつらと協力しろ、との事だ」

隊士達の前に立ちそつと言つのは、先ほどの無線で『局長』といわれていた男。

「質問ですけど、その銀誓館ぎんせいがんとか言つ集団は何者なんですか？」

「それについては詳しく教えてくれなかつた。来た本人達に聞けと

隊士の一人がそう聞けば男はそつ返す。

「で、そいつらはいつくるんだ?」

「今日中には。とつアンが連れて来る。連絡は以上だ。解散

彼の一言で全員がぱらぱらと部屋から出て行く。

波乱の幕が開く

プロローグ（銀魂側）（後書き）

今後も、真選組メインだと思います。銀魂は。次回、銀誓館学園のメンバーと真選組が合流。の予定です。

時間がありましたら、感想を頂けると幸いです。

N.O.I (前書き)

本編です。

つーんやつぱり、銀魂キャラの口調が厳しいです

「準備は良いな」

漆黒の髪と目をした少年 三方原蒼竜、中3年 がそう問う。

「つけても、カードさえあればなんともなるからな。俺らは

黒髪に赤目をサングラスで隠した少女 下西成実、中2年 がそう返す。

「確かにね。雪ちゃんも平氣？」

白銀の髪にエメラルド色の目をした少女 甲沢愁、中3年 はすぐ横に居る少年に声をかけ

「うん。大丈夫だよ」

声をかけられた、雪のよつに純白の髪に深海のような目をした少年 市田雪兎、小3年 は元気に返事をする。

彼らが居るのは少し傾いた太陽が射す「奈森キャンバスの屋上」。目の前では空間が少しうがんでいる。

「じゃ、行こう」

4人が同時に歪んだ空間に足を踏み入れる。
一瞬グンと引っ張られる様な感覚を感じた後に彼らが居たのはすでに屋上ではなかった。

4人が立っていたのは川原。すぐ側には長屋が並び江戸時代のよくな感じだが少し先に目を移せば東京で見るようなビルが立ち並んでいる。

「実際に見てみると不思議だね」

「時間の流れ、違つみたいだな。じつ見てもまだ正午過へりとところか」

愁が感心したような声を上げ、成実は気づいたことを素直に口にする。雪兎は周りをきょろきょろと見渡し、蒼竜は無表情に予報士に渡された通信端末を見つめる。

「蒼竜お兄ちゃん、じつしたの？」

「ん…」

「ひやつ」

「はー。そうです

「やつぱりそうか。おじさん、待つてたよ」

彼らの側にやつてきたのは、松平片栗虎。

愁の陰に隠れた雪兎の事を見つつも、蒼竜は返事を返す。

「驚かれないんですね。俺らの事を見て信用しないんじゃないかと

思つていたのに

「お前たちのことを話した奴らが、来るのは餓鬼だろ」つて言つてたんだ。とつあえず、江戸に居る間は真選組のところで世話をなつくれや。あこつらこまちつ話はしてある」

「分かりました。ありがとうございます」

「案内してやるからつこへ来い」

そういえば松平は歩き始める。その後を4人は付いて行く。ちなみに、雪兎は愁の陰に隠れたままだ。

「しつかし、お前らほんとに頼りになんのか？」

真選組屯所の一室で4人は局長の近藤勲、副長の土方十四郎と向かい合っていた。

ちなみに上の発言は、土方のものである。

「信用してくれないのも分かるけど…」

「でも、雪兔たちいろんな事やつてきてるよ」

困ったように首をかしげる愁と、プクッと頬を膨らませる雪兔。成実と蒼竜については腕を組んで黙り込んだままだ。

「そういうても、お前ら全員10代前半だらけ。しかもそいつには10にも満たないじやねえか」

土方が指差したのは雪兔。確かにこの中で一人だけ小学生だ。微妙な沈黙が両者の間に流れる。それを破ったのは

「なら、俺と手合わせして実力を知つてもうひとつ言つことどどつだ？」

腕組みを解き真っ直ぐ土方を見つめる赤い瞳。

「おまつ本氣で言つてるのか？」

「冗談で言える」とじやねえよ

慌てて問つ蒼竜。いつもと全く変わらない調子の成実。

「成実ちゃんだったつけ?それは無茶だと…」

「やる前から無茶だとは思わない」

近藤も止めるがばつをつと言いつた。

「そこまで自信があるなら、相手してやるひじやねえか。その代わり、後で泣きを見てもしらねえぞ」

「あまり、甘く見ないでもらいたい」

睨みを利かせる土方と、すうっと目を細める成実。

「おい、トシー。」

「大丈夫ですよ近藤さん。少し実力を見せてもうつだけだ」

「なる、大丈夫なの？」

「ああ。大丈夫じゃなきゃ言わない」

「庭先でろ。そこで相手してやる」

N o . 1 (後書き)

とつづアんの口調分かりません。意味不明です。

土方と成実は剣を交えることにー.?
つーかそんな」としてる暇あるのか、という突っ込みは無しの方向
で。

コメントお待ちしております。

No・2（前書き）

果たして、土方と成実の勝負の行方は?
そして、銀誓館メンバー本格始動

庭で木刀を構える一人。いつの間にか数人の隊士たちも集まつて見て見物人と化している。

「先に相手の額につけられた皿を割つたほうが勝ちだ。いいな構わない。……蒼竜、俺のウエストポーチ投げてくれないか？」

土方の説明の後、くるりと蒼竜のほうを向きそりこつ成実

「へつ？ なんで？ って重つ！ 何入つてんの？ これ」

そつまにつつも思いつきり放り投げる蒼竜。

「砂袋などなど、計2k分つてとひる」

紐の部分を掴み一度後ろに大きく振つてから質問に答える成実。

「何でそんなの…」

「訓練、つか普段一刀だから、バランス悪い」

中からいくつかの袋を取り出しウエストポーチを腰につけもう一度構える成実。

「馬鹿にすんじゃねえ！」

「冗談！ これが無いとバランス悪いんで、ねつ！」

同時に交錯し木刀がバシリと音を立てる。そのままじょじょに鎧迫り合へ。間合いを取り再び木刀を繰り出す。

「土方さんと互角にやるとはね」

「副長、手抜きじゃないですよね」

「まさか、トシはそんな事しないわ。実際に彼女の力量が同じなんだろう」

どいか感心したようになりのせ、一番隊隊長の沖田総司、監察の山崎退、近藤。

「あれ?」

「あーあ」

「はあ…」

一方、あきれたりため息を付いたりするのは、上から、愁、雪鬼、蒼竜。

その間も一人は止まるところなく、縦横無尽に動き回る。

「テメー何処で」

「なんだ?」

「アリまでの腕」

「…」

「身に着けた?」

「生きていた世界の」

「あん?」

「流れだ」

互いに近づいては離れを繰り返しながらそんな会話をする。

「どんな世界だよ」

「そちらさんが取り締まる世界」

間合いを取る一人。正眼に構える土方。下段に構える成実。
先に動いたのは成実。

左手を離し、切っ先を下に向け一気に間合いをつめるように走り出す。

ガリガリと木刀の先が地面を削る。

「甘すぎだー」

「そのまま返すー!」

「なつー!」

額の皿に向かって突き出された木刀が届く前に後ろへ飛び下がり、着地と同時に再び飛び上がり木刀を踏み台に一段目、更に土方の肩

を踏み台に三段目。

後ろに回りこみ木刀を繰り出す。

「せやつー。」

パリン

土方の額の皿が割れたと誰もが思つた。が

「やつぱり甘かつたのはテメーの方だったな」

「ですね」

割れたのは成実のほうだった。どこか不満げな顔の土方。皿をそらし答える成実

「ま、テメーらの実力は分かつた。認めてやるよ」

「…」

成実はペコりとお辞儀をして仲間のことをいふまでもがる。

「やつぱり無理だつて」

「うそつこ」

「やつ、だな」

「…成実」

愁と雪兎がやつぱりと頷く中、蒼龍は成実に小声でさわやぐ。

「手、抜いたる？」

「…『ばれたか、やつぱり』

「何で手抜きしたんだ？成実はそんなことしなこと思つたけど」

「まず、俺は昔ほど感情ばかりで動くわけじゃない。少しは考えて行動できるようになつてゐる。それに、周りにほかの隊士が大勢居ただろう。あの場で俺が勝つたら、副長さんの立場といつかなんつうか色々悪くなるかもしれないからや」

「なるほどな…でも、だからって手抜きせむつかと思つ」

「まあ、それは俺も思つたや」

そんな会話のさなか、

「局長！…またです！…例の場所で今度は死体があるみたいでけど」

「なに…アシ、総悟！…至急、向かつてくれ」

「「オス！」」

彼らとは少しほなれたところでそんな会話がなされる。
それを聞いた4人はほぼ同時に近藤のほうを向く。

「近藤さん、それ俺らも付いて行つていいでですか？」

「構わないが……」

「俺のやる事もあるんで。邪魔はしません」

「なら良こじやないですかい。邪魔したときは置いて来ればいいんですや」

「じゃ、総舖、それほとにせたま田だから…」

「澄と雪兎はここに残るんだ、俺と成実だけ付いて行かせてください」

「なりわいかと来て。置いてくわ」

わわと歩き始める、土方と沖田。その後に蒼竜と成実は付いていく。

「蒼ちやん、気分悪くならない程度にね

「…」

「分かつてゐる」

愁の声にピクッと沖田は少し反応するが、それと並んで「…」ともなく蒼竜は返事をする。

No.2(後書き)

次から、少し能力者について触れていくつもりであります。
感想ありましたらよろしくお願いします。

20・3（前書き）

少々、雑になつてゐる仮がしなくもありますんが…

少しだけ戦闘入ります。もっとも銀誓館メンバーですけど。

「…」

「蒼竜お兄ちゃんと成実お姉ちゃん、行つちやつたね

「だね」

縁側に座つた愁の膝の上に雪兎が座つてゐる。因みに、雪兎の頭の上に愁は顎を乗せてゐる。

「といふで、何で一人残つたんだ?」

「ん…特に意味は無いんですけど、確認事項のためといひでなんかお手伝いできる」とがあればまつて事で蒼ちゃんが残るよつて

横に座つてゐる近藤が尋ねたことに愁は顎を向けて答へる。
その間、愁の手は雪兎の髪を玩んでゐる。

「やつか…と書つより、確認事項?」

「はー。あ、そろそろかな…雪ちゃん、『めんぢょつと降りて

「やつと」

「何をやつてるんだ?」

膝から下つて雪兎と立ち上がり空中に手を伸ばして何かを書く愁。

「見えないんですね？私は一部の人にだけ見える文字を書いて」と
が出来るんで、ちょっとした実験を」

「実験？」

「はい。…これでよしつと」

「逆に怒らせちゃわない？」

「ま、く一もでしょ」

「何がなんだか理解できないんだが…」

「ヤーヤと笑つ愁と雪兎に対して、近藤は全く理解できず困り顔。
『説明する』私は空中に『リリスのはーか』って書いたんです。
リリストについては後ほどお教えますから」

「なるほど…確かに場合によつては怒らせるだらうな」

「「」や「あ。あ、何か手伝つことありますか？暇なん」

簡単な愁の説明に頷く近藤。愁の尋ねたことについては少し考えた後

「じゃあ、山崎と今まで使われてなかつた部屋の片づけをしてくれるかな？君達にはその部屋を使つてもらおつと思つてゐるから」

「わかりました。とにかく、山崎さん何処にいるんですか？」

「…あそこでミントンやつてる

「…好きなんですね、ミントン」

「特に、今トシが居ないからな…」

「雪兔、一緒にやつて」よつと

「あ、雪ちゃん」

近藤が示したところを見て思わずあきれる愁、アリソンと縁側から降りて走つていへ雪兔。

「山崎のお兄ちゃん、一緒にやつて」

「えつ？ああ、雪兔君か。良いよ、一人じゃ素振りしか出来ないか
う」

「やつたあー！」

笑顔でいそいそとケットを出し始める山崎、アリソンとアリソン
ピヨンと山崎の側を跳ねる雪兔。が、しかし

「じゅ無くって…近藤さんに今まで使われて無い部屋の片づけを一
緒にするよつて言われたんで」

「あ、そうだったのか。じゃあ、先に終わらせよつか。終わったら、
一緒にやつね」

「…やん」

愁に言われ、山崎は出しがけたもう一つのマケットを仕舞い雪兔は
膨れつつも同意する。

「片付けなきゃいけないのは、」うつだよ。行けり

山崎が先に立ち、その部屋へと向かつた。

「なあ、本当に行くのか？」

「はー? いまやうり向言つてるんですか?..」

「行かなきゃ意味が無いっての」

「まあ、それもやうだな…」

パトカーから降りる直前士方が一人に問い合わせ、蒼竜と成実は少しボケンとしつつも答える。

現場は余りにも悲惨だった。血溜りの中に内蔵がズタズタにされた女性だつた物が一つ。真選組隊士達が顔を背けたり眉をひそめる中、成実と蒼竜は平然としたままそれに近づく。

「何してんديー」

「任せた」

「承知」

沖田の問いに答えず、ポケットに手を入れたまま蒼竜に言つ成実と同じ死体を見据える蒼竜。

蒼竜から出る不思議な氣に真選組の面々は思わず一歩後ろへと下がる。

次第に、彼の顔は青ざめ手が震え始める。

「やめて……！」

「おーーー！」

「蒼竜ー！」

彼らしくない甲高い声で叫んだ蒼竜に駆け寄る士方と腕を掴む成実。と、死体が起き上がつた。彼女はゆらりゆらりと近づいてくる。隊士達に動搖と恐怖が走る。

「な、なんだ……」

駆け寄りかけた土方はその場で硬直し、

「じょ、[冗談きつ過ぎ]でさあ……」

沖田はその場から更に三歩下がった。

「蒼竜……」

「やる」とは一つだら一が一・そ一よりもつと下がってください…」

「何するつもりだ！」

「いーからとつと下がれ！」

全員が下がりきったのを見ると一人はポケットからカードを取り出し掲げた。

『イグニッシュヨン』

二人の声が見事にシンクロする。瞬後に二人の服装が替わる
蒼竜はYシャツに長ズボン、マントを羽織った銀誓館学園の中等部
制服、手には長槍を握り締め傍らには体長1mはある蜘蛛童。
成実は黒く丈の長いコートに黒のブーツ、腰の両側には日本刀が一
振りづつ。

「行くー！」

「童ー！」

即座に地をけりゴートの裾を翻しながら刀を抜くと間合いに入った女性の死体を斬り付ける。同時に蒼竜の側にいた蜘蛛童、童が猛毒を秘めた顎で噛み付き、蒼竜が長槍を振るう。血が飛び散り成実の顔を染めた。

もう一度、成実が今度は闇を纏つたようなオーラとともに刀を振り上げる。

ドサリと死体が倒れる。

片手に刀をぶら下げたまま成実はそれを見下ろした。蒼竜も側へ行く。

少し一人で黙祷を捧げる。

「お疲れ様、童」

「…」

スッと童の背をなせる蒼竜、無言で刀を納める成実。十秒ほど目を瞑り集中すれば、元の服装に戻る。

「テメーら、何を…」

「今のは、リビングデットって言われてるゴーストの一種です。まあ、ゾンビとかと同じって考えてもらつて大丈夫です。多分」

「あーゆつのを退治してやるのが『能力者』のやる事だ」

「因みに、もう襲い掛かつてこないので安心してください」

土方の問いかに、二人はそう答えた。

「後もうこくつか」

「それは、戻つて残つた二人も合流してから説明します。それより、
ここ調べるのが先じゃないですか？」

と言つても、何も出てこないと感じますけど…と蒼竜は付け足した。

「…死体については身元調べろーそれ以外は撤収だ」

特にする」とも無く、撤収作業を始める真選組。

「蒼竜、何見えた?」

「後でな」

「分かつた。それより…」

「どうした?」

「ここだとこの格好立つな

「…そこか」

「いや、ほんとの事言つたままで」

「…やつぱり女なんだな、お前」

「それどー言つただよー」

その横でそんなことを話す一人だった。

No.3(後書き)

愁と蒼竜のやつたことについては次に説明します。

因みに、蒼竜のイグニッショーン後の格好は

『http://t-walker.jp/sr/html/world/world_035.htm』

の中学生冬服です。

次回

能力者について更に詳しく説明する銀誓館メンバー。

そして、なぞの事件解決の糸口はつかめるのか。

あくまで予定です。

感想等ありましたらよろしくお願ひします。

No.4(前書き)

かなり長い上に読みにくいかもです。
シルバー・レインについての説明が大半です。

「本題にたどり着くまで厳しいな」

「色々ありすぎるね…」

「何から話せば良いかな…」

「世界結界とシルバー・レインについて知つて貰わないと厳しいだろうな」

近藤と土方、各隊の隊長それに山崎。彼らと向かい合ひつつに座り、学生四人は簡単な打ち合わせをする。

一応直ぐに打ち合わせは終わつたみたいだが。

「決まつたのか?」

「はい。まず世界結界とシルバー・レインについて話しますね」

そう切り出したのは愁。四人の中では結構記憶力のいいぼうだつたりする。

「世界結界って言つのは、一人一人個人が『不思議なことなどない』と信じることによって形成されます」

この強力な思い込みは、目の前で不思議な事件が起こつたとしても、それを認める事が無いほど強力です。彼らは、目の前で巨大な猪に人間が踏み潰されても『よくある交通事故』であると認識し、不思議な事など何も無かつたと考えます。

(http://t-walker.jp/sr/htm1/world_02.htmより)
http://world_01.htmより)

「つまり、今この場に巨大な猪が突っ込んできたとしても」

「湾曲して、『車が突っ込んできた』と解釈する」

土方の例えに成実は領き答える。

「次にシルバー・レインは、神秘の力を持つ詠唱銀が地上に降り注いだ光の雨の事です（http://t-walker.jp/sr/world_01.htmより）。えつと…あつた。これです」

首に提げた巾着から取り出したのはいくつかの小さな銀。普通の銀よりも光り輝いている。

「普通の銀にしか見えないんだがな…」

「まあ、そなんですけどね…。詠唱銀が降り注ぐことによって、たまっていた残留思念が具現化して、ゴーストになるんです。ゴーストは人の命を脅かすものだから、そんな事が無いようにするのが私たち能力者の役目なんです。えと、これで一応私たちがここに来た理由に繋がる事は話したと思うんですけど…」

「まあ、さっきの話とあわせれば大まかには分かった。ついでだ、お前らの能力つて奴についても教えてくれないか」

愁が心配そうに聞けば、近藤はそう答えた。

近藤に聞かれたことについては、少し顔を見合させた後

「イグニッショーンするのが早いか」

「うん。 そうだね」

そう言い、四人はそれぞれカードを取り出し一度外へとれる。

「何やつてんだ?」

「ま、色々理由はあるけどね…」

スッと、四人がカードを掲げる。

『イグニッショーン!』

四人の声がシンクロし一瞬後に全員の服装が変わっている。
雪兔は青い浴衣に右側頭部に狐の面、素足で手には青いヨーヨーを持っています。

愁は紅い袴の巫女姿で手には鉄扇。

蒼竜と成実については前頁にあるため割愛します。

「さっき俺らが持っていたのがイグニッショーンカードって言われるもので、普段学校で生活するのに能力者の持つ力は…なんていえば良いかな邪魔になるから詠唱兵器とかと一緒にこのカードに封じ込めておく」

イグニッショーンした場合、それまで装備していた普通の衣服などはカードに封じ込められ、イグニッショーンを解いた時に戻つてきます。(http://t-walker.jp/sr/htm1/)

word\word_04.htmより)

と蒼竜は説明した。

「で、俺らの能力だよな。俺は簡単に言えば自己の魂を武器と合一し、その『覚悟』と『意志』とにより強大な破壊力を生み出す闇の剣士【魔剣士】が本業つまりメイン。あと熱と光とを操る【ファイアフオッグス】がサブ。因みに本業能力っていうのがあって…」

そこまで言つとスッと成実の姿が消え、再び同じ場所に現れる。

「魔剣士は闇纏いつつて能力の無い人の目や鏡、カメラに写らないようにすることが出来る。そんな所だな。普段戦う時に使つのは今は無理だな。危険すぎる」

「さつき、お前の刀に黒いオーラが付いたのもそつなのか？」

「ああ。あれも俺の使うアビリティ…能力の一つ」

土方の問いに成実は頷きながらそう答えた。

「私は聖なる光の波動を、自身の魂を媒介として行使する【ヘリオン】がメインで「土蜘蛛」の力を最大限に引き出す事ができる【土蜘蛛の巫女】がサブです。本業能力は、ヘリオンサイン。空に能力を持たない人と天体観測の器具に移らない文字を書くことが出来るんです。実際にやっても見えないだらうから…」

「さつき、やつていたのがそつなんだな」

「はい。一応まだ残つてますけどね」

「あれは挑発しそぎだ」

「えへへ」

近藤に尋ねられコクリとうなずく愁に蒼竜が突つ込みを入れる。

「雪鬼はね、重力とか関係なく動ける【月のトアライダー】が本業で、己の内に秘めた「獣」の力を、自由自在に引き出して戦う【牙道忍者】がサブだよ。本業能力はエアライドって言つんだけど、どんなに高い所から落ちてもたいした怪我をしないんだよ。だから…」

「童捕まえて、つーか引き戻して」

タツタツタと近くの木に向かう雪鬼の腕に蜘蛛童の伸ばした糸が絡みつき引き戻す。

「雪むちゃん、駄目」

「何でだめなの?」

「心臓に良くない。以上」

ブクリと膨れる雪鬼の頭を愁が撫ぜ、成実はばつさつと断言する。

「で、俺は死者の魂に触れ異形の者操る【靈媒士】がメインでサブの能力の変わりにコイツ、使役ゴーストの【蜘蛛童】を相棒にしてる。俺は童つて呼んでいるけど、ちゃんとおれのことを補佐してくれる」

「大きい…噛み付いたりとか」

「しませんよ。こいつは賢いから」

山崎の問いに、蒼竜は童の背を撫ぜつつ少し笑みを浮かべて答えた。

「本業能力は断末魔の瞳つて言つてゴーストに人が殺された場所で、ゴーストに殺された人間の最期を被害者の視点で見る事ができる」

「さつき蒼竜がやつていたのはそれなのかい？」

「そつ。さすがに気分悪くなつたけれども」

「何を見たんだ？」

「まあ、その前に、ゴーストの種類説明しないと理解してもられないだろうから。ゴーストにはいくつかの種類があるんですね」

強い怨念を残して死んだ生物の残留思念が、シルバーレインの影響によってゴーストとなつた地縛霊。

多数の動物の残留思念が寄り集まり、シルバーレインの力を得てゴーストとなつた妖獣。

肉体を持つゴーストで、動く死体ともいえる存在のリビングデッド。激しい快楽と恍惚の内に死んだ女性の残留思念が、シルバーレインの力を得てゴースト化したリリス。

「特にリリスは一番厄介なんだよな。知能を持つている分色々策巡らして来る」

「ま、そこまで説明したところでさつき俺が見たもの説明します。あの女性はリリスよつて殺されます」

少女の姿をしたリリスによつてあの女性は殺された。
あの女性がリビングデットになつた理由は不明。
と言ひ感じのことと蒼竜は手短に説明した。

「つまり、俺らが捜査している事件はその、リリスとかリビングデットとか言ひつけたのが関わつているって事かい」

「コジングテットです。まあ、簡単に言えればやうなります」

「簡単に言わなくててもやうとしか言つようが無いから。 もうと、とりあえず解除するか」

沖田の言い間違いを訂正した後見事にボケた愁に蒼竜は速攻で突っ込みを入れる。横で雪兎が笑いをこらえる。

4人が同時に目を瞑る。10秒経てば、彼らの姿はイグニッショーン前のものに戻る。

「それでね、お願いしたいことがあるの

「ん? なんだい?」

「「」の事件、雪兎たちに任せてしまいの。 その方がやり易いから」
庭に下りていた全員が部屋に戻り座つた後、雪兎は近藤にやうじつた。

「えつ……いや、それは」

「危ないのやうのやうのは無しで。 これが日常だから」

近藤の言葉を途中で遮ったのは成実。彼女の目が先ほど土方と対峙した時のようにスウッと細くなる。

「そうであつても、それは出来ねえ相談だ。じつにまこつちの義務やら色々あるんだ。そう簡単に餓鬼にすべて任せめるなんて出来っこねえ」

「そつは言つてもこつちも一般の人を巻き込まないことが義務であり仕事なんで」

「……」

「……」

「……」

「……なら俺らがそつちに協力つて事で。その代わり干渉しないでほしい。それだつたら？」

「蒼竜！？」

「それなら、まあ良じだろ」

「トシー。」

土方と蒼竜。長い沈黙の中でフウと息を吐き先に折れたのは蒼竜だった。

蒼竜の眉間に皺がよっている。土方は土方で苦い顔をしたままだ。

「仕方ない。それに、そつは言つても協力してもらわないとけないこともあるかもしない。少なくとも、俺らはここに居候させてもらひわけだし」

「…蒼竜がそつ言つなら従つ」

「あいつらだけ危険な事させたるわけじゃない。それなり良いだろう」

「そうだな」

双方、内部でも話は付く。

「で、そつちはなんかいい作戦もあるのかイ？」

「正攻法。それだけ」

「地図、見せてもらえますか。この辺りの」

学生4人の表情が変わった。

No.4(後書き)

中に書いてある事のうち、本文内に記載が無い部分は

【http://t-walker.jp/sr/html/world/world_07.htm】（ジョブについて）
【http://t-walker.jp/sr/html/world/world_12.htm】（ゴーストについて）

を引用、参考にしています。

次回、真選組と銀誓館メンバーの共同戦線発動です。

No.5 (前書き)

一応協力体制をとることとしたものの…

「……つて事は、誰か一人が近づく。そんで裏に行つたら残りが突撃だな」

「まあ、妥当な所だとそんな感じだね」

「それって妥当って言つより結構危ないんじやないの？」

「近藤さん、今このいつ等に何言つても無駄だ。聞いちゃいねえ」

成実が行動予定の大まかな纏めをして、愁が頷く。

近藤は至極真つ当な事を言つが誰も聞いていない。土方も近藤の横で煙草を吸いつつ眉間に皺がよっている。

先ほど協力体制といったものの殆ど子供たちが決めてしまつていて。今ここに居るのは近藤と土方、子供達のみ。各隊長達は既に居ない。山崎は冷めたお茶を下げるために出て行つた。

「で、誰が囮になる」

「……」

「……」

「……」

蒼竜の一言に視線が集まるのは

「…もしかして、俺？」

「あ！」

「うそ」

「該当あるのぬお前だナだら、蒼龍」

お決まつのよひに蒼龍。

「ニヤドウタ」

「ハツヒトハナビ、あれば男のまつが眞に入らしこ」

「雪兎じや、子供過ぎてダメでしょ」

「俺は女だし。それに身長等々考えて蒼龍なら未成年には見えないだろ」

「…」解。じや、後は特にいやといふか

溜息をつきつつパタンと後ろに倒れこむ蒼龍。米神に中指を立ててグリグリとやるのは何時もの癖。特に苛々している時の。

「おこ、三方原」

「何ですか」

「困るよしてかの格好じや田立とかそういう言ひ方考えないのか

？」

「あ…つて…」

土方に言われガバッと起き上がった蒼竜はポケットの中で鳴つてい
る通信端末を取り出す。

学園側からの連絡を流し読みした蒼竜はまた溜息をつく。心なしか
視線がさまよつている。

「えつと…蒼ちゃん、何があつたの？」

「良い知らせと悪い知らせ、どっちが先に聞きたい？」

「えつ…良い知らせかな」

視線を戻しそう聞けば、少し考えた後愁はそう答える。

「じゃ、そっちから。ひとつでの服を万事屋に買つといてもうらえる
よう頼んであるから取りに行かつて」

「それって、良い知らせか？」

「もう一つのに比べれば十分良い知らせに感じると思ひよ」

もつともなツツコミを入れた成実に蒼竜は苦笑いしつつ返す。

「万事屋つてあいつらか…！」

「それしかないと思いますけどね。あとで、場所教えてください」

「しゃあねえな…後で案内してやる」

「悪い知らせつて何?」

溜息をつづく近藤と土方。それを見事にスルーして聞いたのは雪兎。

「テスト。期末テストがもうすぐ始まるつてさ」

「えつ…それつてもしかして」

「もしかしなくともとんでもない点数だよ…」

ズドーンとテンションが下がる中学生組。雪兎それに近藤と土方はポカーンとしている。

まあ、雪兎については小学生と言つてしまつて心配していないのかもしれない。

「でも、中学だから赤点でも進級できるでしょ。それにいくら疑い符が受けたと言つてもそこまでは悪くなじ。はずか」

「そう思つといつか。さとと、こんなところだな。愁、学園のほうが頼んどいた服取りに行つて貰える?」

「蒼ちやんは?」

「戦場確認。成実、付いてきてくれる?」

「分かつた」

すつと立ち上がる蒼竜と成実。愁は座つたままグッと体を伸ばして

もつ一度地図を覗く。雪兔はこいつの間にか外に出でて既にこの場に居ない。

「俺も行く。ガキだけで行つて良によつた所じゃねえ」

「えつ…それは」

「さつき協力ついたのはだれだ」

「…同行お願こしまや」

立ち上がりつた土方にそつこわれて言い返せない蒼竜。はあと溜息をつきつつやういった。

「じゃあ、愁ちゃんは俺が案内するよ」

「あつがといわこまわ」

それぞれが行動を起こし始めた。

No.5(後書き)

次回あたり、やっと銀魂の主人公が出てきます。多分。
時間がかりすぎですね。主人公出てくるまで…

ちなみに、本文中に出てきた『疑身符』とは符術士というジョブの
本業能力です。

感想、評価ありましたらお願いします。

No.6(前書き)

近藤に連れられて万事屋へ向かつ愁。

土方とともに今夜の舞台を下見に行く蒼竜と成実。

といひで、雪兔はどうしたの?といつのは最後に。

「江戸の町つて広いんですね」

「ああ。 迂闊に近づかない方が良い所も多くある。 そういう所だよ
！」

「東京と同じだな。 当たり前だけど」

「東京？」

「私たちの世界での首都です」

「そうか」

無言で歩く一人。

「着いたぞ。 ここだ」

「ありがとうございます。 …すいません」

万事屋の入り口の前に立つ近藤と愁。
愁は扉を数回ノックする。

「はい…あれ？近藤さん。どうしたんですか？」

扉を開け出てきた志村新ハは近藤のほうを見てそう尋ねた。

「やあ、新ハ君。用があるのは俺じゃなくつて、こっちなんだけどな」

「あ、君？もしかして銀誓館学園の人？」

「はい。取りに来たんですけど…」

「うん。じゃあ上がつてもういいかな？確認してもうわないといけないから。近藤さんもどうぞ」

「お邪魔します」

そういつて、新ハは一人を中に案内した。

「銀ちゃん、お密さんですよ。何時までジャンプ読んでるんですか？」

「おひ…つて…何でゴコラがここにいるの…密ひトイイチの事…？」

「ゴコラは挨拶だな万事屋」

「違いますよ。じつちの女の子です。足降ろしてジャンプ下げれば分かります」

机の上に足を投げ出しジャンプを読んでいた坂田銀時は顔を上げて一番に目があつた近藤のことを見てそういうが、新ハに言われ足を

降ろしへジャンプを少し下げる。

「あれ？ そんなちつこいのが居たの？」

「ちつこのはひどいです！..」

何とか愁の頭が見えてそいつえは愁はむくれて言い返す。
確かに、184cmの近藤と166cmの新ハが側に居ると146cmの彼女は小さくて目立たない。

「はいはい。で、何のよう？」

「銀誓館学園の人らしいです。あれ、何処ですか？」

「押入れの下の段」

銀時に言われ新ハは押入れを開け風呂敷包みを取り出した。

「男物、女物4枚ずつで合計8枚。確認してもらつていいかな？」

「はい…確かに。ありがとうございます」

「ううん。これが仕事だし今回はそれなりの報酬を貰つていいからね。家賃もしつかり返済できたら」

「ところで、『ココラ。そのちつこいのは何なんだ？』

風呂敷を包みなおし愁に渡す新ハの横でそう銀時は聞いた。

「それは機密だ。言えんな」

「セレーニーのナビゲーションだろ？」

「だから」

「答えられません」

「ありがとうございます。そつまつて愁は風呂敷包みを抱え近藤を

引っ張り出で行ぐ。

残されたのは新ハと銀時。

「何言つてるんですか銀さん…怒りやがつてしまわよ…」

「あの餓鬼はそいつ辺に居る様な奴じゃねえ。そつ思つただけだ」

「確かに、餓鬼だけで来て良いような所じゃないな」

「ああ。少なくとも俺がいれば変な奴らもそつ簡単に手出しあしらへ

「さすがは、鬼の副長さんですね」

何が言いたいんだと言いつつ睨む土方を見ずに問題の路地へと入り込む成実と蒼竜。

「ちょっと狭いな。前後から挟撃しないと開いたほうから逃げられる。場合によつちやあ上に逃げられるつて事もありえる。どうする

蒼竜」

「俺がリリスの前に回つて足を止めさせる。そしたらリリスの後ろ

から成実たちが攻撃でビリだ?」

「…雪兎にビルから飛び降りさせてお前と並ばせるもビリのもありだな」

「ああ…其れがあつたか」

「おいおい、あのちつここのをビルから飛び降りせしむるのは殺すよツなもんだぞ」

細い路地を行つたりきたりしながら話しかけ「人に土方は口を挟む。『さつきの話し聞いてました? 雪兎はどんな高さから落ちても怪我はしないんで問題は無いです』

「…そうだったな。だがな、ビルの中にビリやつてはこる? 鍵掛かつてるぞ」

「それは…元本業がいるから平気。な

「…ちつ。しゃあねえな」

「犯罪行為でもするつもつなら、この場でショット引くぞ」

土方に言われて黙り込む一人。

「まあ、協力体制で了承したんだ。ちょっと付いて来い」

「「…」」

そう言つて土方は一人を連れて問題のビルの中へと入つていく。

10分後…

「ありがとうござります」

「どうせ夜もお前らだけで行くつもりだ。なら、今のうちに頼んでおくしかねえだろ？」「

ビルから出てきた蒼竜は隣に立つ土方にそいつて頭を下げる。土方がビルの管理人に頼み、明日まで外階段の鍵を貸してもらつ事を許可してもらつたのだ。

ほらよと、鍵を蒼竜に預ける土方。

「となると、雪兎に上から飛び降りさせて挟むか。愁にはあらかじめビルの外階段の陰に隠れさせて、雪兎も上に上らせておく。俺は奴に接触する直前までお前といつてその後は裏道を通つて先回りをする。後ろを愁と雪兎、前を俺と蒼竜で挟むでいいか？」

「完璧」

「現場はもういいのか？それなら戻るぞ」

「はい」

そういうて3人は屯所への道をたどる。

1 1 5 1 - .

1 1 5 0 - .

「152-」

「153-」

「15ああー落としかやつた…」

「4本目は俺の勝ちだね」

ショボんとする雪兎と少し嬉しげな山崎。
一人はバトミントンのラリーをしていた。ともに2本づつ勝つてい
る。

「誰かと//ントンやるのは久しぶりだよ。やつぱつ//ントンは誰か
とやつになことね」

「雪兎もね、久しぶりにやつたよー。」

「せひと、やつぱつ夕飯の準備しなきやいけないから、今日はこれ
ぐらじにしょい」

「うふ。タレ飯の準備、雪兎も手伝つー。」

「ほんとー助かるよ。じゃ、行こい。」

雪兎の手を引き台所へと向かう山崎。
因みにミントンの道具は茂みに隠した。

ほかに比べゆうべつと過ごしてこた一人だった。

No.6(後書き)

なんか最後二人だけ場違いなのは、まあねつて事で。
次回少々危険な描写も入るかと思います。

もしよろしければ感想お願いします。

もらえると更新スピードが上がるかもしません

No.7(前書き)

やつと銀雨組の本格始動といつといふでじょつか？（キクナ）
成実が少々キャラ違います。でも、そういう子です。

「遅お兄ちゃん、」さればされば良い?

「あ、じゃあそこにおこなって。其れと、鍋の中にもの袋入れて貯
えるかな?」

「うん」

台所では夕食の準備をする山崎の横で雪兎がチク チク チクと動き手
伝いをしていた。

「あ、雪ちゃん此處に居たの?」

「愁お姉ちゃん… それどうしたの?」

ひょいっと顔を出した愁は雪兎を見つけそう声をかける。
雪兎は雪兎で、愁の着ている着物に興味を示していた。

「ついでに買つてきたの。山崎さん、雪ちゃん借りていいですか
?」

「大丈夫だよ。随分雪兎君には手伝つてもうつたから」

「あつがとうござります。用事終わつたら戻つてきますね。雪ちゃん、おいで」

「はあい。遅お兄ちゃん、あとでね」

「うん。でも、急がなくつていいからね」

雪兎の手を引き去つていく愁の背中に山崎はやつ声をかけた。

「おい、成実、諦めろよ
「わかつてゐるよ。でも……」

既に着替えた蒼竜に言われつつも手に持つた着物と睨めっこする成実。

なぜ彼女は睨めっこなどしているのか。理由は簡単。その着物の柄が花柄だということ。

何時も無地の黒い服を着てている成実にとつて柄が入っている物を着るのに躊躇しているのだ。

「あれ？なる、まだ睨めつこつたの？」

「分かってないでばー！」

「じゃあ、せつと着なよ。雪ちゃん、すよつと」

ぱつぱと手際よく雪兔に着物を着せる愁。その間、成実は睨めつこを続けている。

「愁お姉ちゃん手際良いね」

「まあね。はい終わり。……なる、まだ決心しないの？即断即決のな
るがめずらしこ」

「… るせえ」

「愁、後は任せた。雪兔、行こう」

「うんーあ、でも、退お兄ちゃんの手伝い行かなきゃ」

「なら俺も行くよ」

そう言いながら、出て行く男子一人。残ったのは女子一人。

「着なきやだめ？」

「いやならいいけど、田立つよ

「田立つのは嫌だ……でも

「…なら強制だね」

「えつ…ちよつ…」

「待たないからね…」

「きやつ…」

「あつ…」

らしくない悲鳴を上げ部屋から飛び出そうとする成実を愁はグイッと引き戻す。

「観念して」

「は…」

シヨンと小さくなる成実にも着物を着せていく愁。

「食事中も騒がしい。

「土方さん、そのマヨの量、いい加減にしてくれませんかねい。見てて氣味が悪過ぎでさる」

「うるせな、今更遅い」

「飯やら何やら、色々なものにたっぷりとマヨネーズをかける土方はっきり言つてあんまり見ていたいと思つものではない。まさかこじまでやる奴は普通居ない。が

「魚は百億歩ぐらご譲つて良としても、マヨネーズかけるもんじやないでしょー。」飯とか味噌汁とかは…」

「何時もいひだから今更言わわれても止められぬか

此処にもう一人。

土方ほどではないにしろ、色々のものにたっぷりとマヨネーズをかけるのは、色々なことから立ち直つた成実。

「…此処にも居たか、マヨラーが

「」の一人、どうぞ味覚してんだ…」

思わずあきれる近藤と蒼竜。

特にそれ以外は問題（？）も起きず食べ終わり、食器を片付け。そのまま山崎の手伝いをする雪鬼。他の面々は「」の後の動きの確認を始める。

午後11時

「やつぱつ」の位からが賑やかだな

「じゃあ、愁と雪鬼は場所についてくれ。雪鬼は会図をしたら愁の横な」

「了解！」

「じゃ、先行くな

行け。そういうて鍵を握り締め走り去る愁と雪兎。
その後姿を見送り、

「俺らも行くか」

「あいよ。つーより後は任せた。既に奴はあそじて居るみたいだぜ。
田だけで場所を指示すれば成実は影をまとい姿を消す。そのまま成
実も移動する。

その場に残ったのは蒼竜のみ

「ねえ、お兄さん。暇なら来てほしいな。お客さん入んないと……」

「あ、ああ……」

声をかけてきたリリスに誘導されるように問題の路地へと向かつ。
問題の路地へと差し掛かる。

「何処に行くんだ？」

「…お兄さん、頂きます」

蒼竜がさつ氣無く進路をふらふら前に回れば、リリスは皿ひりの
腕に絡み付いてくる蛇を伸ばす。

「イグニッショーンー」

即座に起動し長槍を振るつ。

「あらっ?」

「成実、愁、雪兔!ー!ー!」

「あいよ」

「待つてました!」

「よつとー着地成功つー!」

「囮つたわね!ー!ー!」

前後を挟まれ、ぎりぎりと歯軋りをするリリス。してやつたりと口元に笑みを浮かべる蒼竜。

「さあてと」

いきましょか!嬉々とした顔で地を蹴り黒影剣を叩き込む成実。それを受け止めたりリスに愁の放った光輝く槍が突き刺さる。

更に雪兔が三日月の軌跡を描く蹴りを叩き込むが、それはかわされてしまった。

「雪兔合わせろー!」

「うんー!」

今度は蒼竜が槍の長さを生かして突きを繰り出すがあつさりかわされる。

そこにはかさず雪兔の蹴りが叩き込まれ、合わせたわけではないのだが愁の破魔矢が上手い具合に突き刺さる。

「鬱陶しい……」

「つ！」

「童……」

「回復するね！」

リリスの叫びとともに伸びた蛇は成実に噛み付いた。それを蒼竜は長槍で突き刺しつつも童に指示を出し、愁は祖靈を成実に降ろす。

入れ替わり立ち代りリリスへと攻撃を与えていく。リリスのほうからも攻撃は来るが、それぞれ自己回復若しくは愁の赦しの舞によつて傷をふさいでいく。

「これで最後……！」

再び成実の刀がリリスを貫き、消滅させた。

「馬鹿ね……これから……」

「………」

消滅の間際、リリスの口からそんな言葉が漏れるのを成実は聞いた気がした。

成実の目が細められ眉間に皺が寄る

「成実？戻るぞ」

「ん、ああ」

路地の出口には既にイグニッショーンを解いた3人が未だその場に立つたままの成実のことを待っていた。

一度その場を振り返るも仲間の元へ合流し屯所への道をたどる。

No.7(後書き)

今回は銀雨組に関係する事件だったの、次あたりは真選組の予定です。
が、予定は未定。

？？？（前書き）

少し違う場所の話を。

???

薄暗い部屋。

3つのモニターが置かれ、その光だけが部屋を照らしている。モニターのうち2つはどこかの町の様子を、残りの1つはローマ字と数字が規則的に並べられたものを映している。

その部屋の中には一人の男が居た。顔は逆光で見えない。部屋のドアが開き、音も無く一人の青年がて入ってきた。

「あと二人、飛ばす方は準備整った。後はあなたの指示さえあればいつでも」

「ああ。すまぬな無理をさせた。こんなにも早く彼らが動くとは思っていなかつた」

「いや。俺は別に構わない。薬物と機械は得意だから」

振り向かず言う男に青年は深くかぶつた帽子の影から覗く口元に薄く笑みを浮かべそういった。

「それより、構わないのか?彼らのうち一人は貴殿の」

「あくまであいつは俺にとつてただの実験台」

「ははは。貴殿も随分冷酷だな」

もつとも私もだろうがな。

笑みを浮かべたまま冷たい声で言い切る青年に男は笑い相変わらず落ち着いた声で言つ。

「ところで、お願ひがあります」

「おや？ 急に改まつてどうした？ 貴殿らしくない」

「奴らの力を試しに行かせて貰いたいんだ。対策練るためにも」

「つまり、あのマンガの世界に行きたいと」

「ああ」

頼む。

深々と頭を下げる青年を見て男はしばし考えた後、

「貴殿が部下を総動員するなら私の手に付く。が貴殿一人なら手に付かないな」

そういった。

「行つて良いこと…」

「やう言つ事になるだらうな。まあ、報告はしつかりしてくれよ」

「わかりました。先に装置を？」

「いや、戻ってきてからで良い。しっかりと対策を立てられぬよつにしてくれ」

「了解」

「貴殿のことは頼つにじてゐるよ。小西鎧磨」

出て行く間際、鎧磨と呼ばれた青年の顔に掛かる帽子の影から覗いたのは血のように赤い眼だった。

？？？（後書き）

読んでもわかるように実は、もう一作品含めようかと思つています。

彼らは黒幕であつたり無かつたり。（どうちだ！）

ちなみに設定を急遽別の場所に移動したのには少し意味があつたり。

彼の名前でそれを思いついた人、予想をどうぞ。

感想をいただけすると励みになります。

少しずつ事が動き始めます。

翌日の明け方。

かぶき町の多くの人々が一番深い眠りに落ちる頃。

(何事だ…)

真選組屯所で仲間たちと寝ていた成実は屯所内の押し殺したような騒々しさに目が覚めた。

「隣はまだ寝てるか…」

原因を突き止める為、横に寝る愁を起こさないように布団から抜け出した成実は部屋を分ける衝立の向こうの気配を探る。

衝立の向こうの蒼竜と雪兎はまだ寝ているらしい。向こう側からは雪兎の小さな寝言と蒼竜の呼吸音が聞こえてきた。

(確認するか)

成実は手早く普段通りの黒い服を着る。

そつと襖を開け足音を消し、廊下を昨日行った大部屋へと歩いていく。

その行動に特に理由はないが、あそこが一番大きな部屋なら何かあればあそこに人が集まっているだろうと日星をつけた。

氣難しい顔をしたまま大部屋から出た近藤と土方。

向かい側から成実が来たのを見て近藤は慌てて手に持っていた紙をポケットに突っ込んだ。

「何があつたんですか？」

「起^レしちまつたか？悪いな

「別に餓鬼が気にするよひなことじやねえよ」

もつかい寝る。暗にそつ言^レう。が

「…昨日の平時よりも微かに殺気が増えた。あいつ等は平気でも俺は無理だな。嫌でも体が反応する」

理由を教えて欲しい。

成実はスッと目を細めた。

「……何でそんな事が分かるんだ？能力者でいろんな所をぐるり抜けてきたのは分かった。だが、昨日までと大して変わらない。なぜ分かつたんだ？」

「…まあ？何でだろうな？」

「てめえ、昨日言ったな？生きてきた場所がどののどの。関係あるのか？」

「まあ？今はなんとも。ま、教えてもらえないならいこれ」

部屋戻つて武器の手入れでもするわ。やつひつなり成実はクルリと踵を返して部屋へと歩いていく。

「まあ、そつだが今はまだ教えるべきじゃないと俺は思うな

「まあ、近藤さん。やつぱり教えたほうがいいんじゃ？」

「こんなものが来たなんてな。

ズボンのポケットから引っ張り出した紙を再び握り締めた。

強く握り締めしあげた紙に書かれた言葉。
何とか読めるのは一言。

江戸全滅

No.9(前書き)

早朝の侵入者。
何者なのか?
成実は何か知っている?

「気にくわねえ」

部屋の前の廊下で柱に背を預けて座り目を閉じていた成実はそう呟いた。

「成実？起きてるのか？」

「起きてる。何だよ蒼竜」

「いや、早いなと思つてさ」

「おめえも十分早い。まだ4時過ぎだ」

「ああ。まだ、一人は寝てるしな。なんかあつたのか？」

カリカリと人差し指で頭をかきつづってきた蒼竜は後ろ手に襷を閉めつつ小声で聞いた。

「何もな…伏せろーー！」

「ーーー」

成実に腕を引っ張られ床に激突しそうになつた蒼竜の頭上を掠めて小振りのナイフが飛んでいく。

入れ替わるように立ち上がつた成実は、何処からかナイフを取り出し飛んできた方向へ即座に投げる。

「誰だ……」

「素早い判断。まだ変わらないみたいだな、成実。コードネーム『夜叉』」

「なつ……」

ナイフを口き落し、現れたのは黒い服を身にまとい黒い帽子をかぶった青年。微かに覗く口元には薄い笑みが浮かべられている。

未だ床にしゃがみ込んだままの蒼竜の田の前には成実の手がある。その手が微かに震えているのを見て彼は驚かずにはいられなかつた。

「何があつたの？」

「蒼ちゃん？なる？」

再び開いた襖の隙間から顔を出した雪兎と愁の寝ぼけた声に思わず成実と蒼竜は振り返つて。

「隙あつてな！！」

「つー」

成実の右腕に深々とナイフが突き刺さり、血が飛び散つた。

「…土方さんたち呼んでくる…雪ちゃん…」

「はわわ？」

雪兎の腕を掴んだまま愁は慌てて駆け出す。ポカンとしたまま雪兎は引っ張られていった。

「蒼竜、お前もいけ」

「…はつ？」

「ひとつと行け！」これは俺が片付けつかう……」

「…わかった」

二人を追いかけるように走っていく蒼竜。その場には成実と青年だけが残った。

「あの三人を巻き込みたくないのか？」

「… るせ」

「でもな、奴ら戻つてくるぜ。きっと

「黙れ」

「少し奴らの命を延ばしてやったわけ？」

「だまれってんだ！…」

感情のままに声を荒げる成実。未だ口元に笑みを浮かべたままの青年。

「相変わらず短気だな」

「うるせえ……」

床を蹴り走り出すと同時に腰の辺りから再びナイフを取り出す。そのまま青年へと突き出す。

青年はそれを手に持ったナイフで弾きあげ蹴りを放つ。

成実は飛び下がりざまに左の袖から先ほどよりも細いナイフを取り出す。

着地と同時に青年の胴をなぎ払う。それを一步下がる事でよける。下がり際に再びナイフを弾き上げる。同時に右腕を振りまたナイフを取り出しあと引かれていない腕へと突き刺す。

「つー」

「…」

初めて青年の口元に笑み以外の表情が浮かぶ。飛んだ血を見て成実は一気に冷静さを取り戻す。

「やつぱり、甘く見すぎたか?なるほどね。これはほつせさせないと」

再び青年の口元に笑みが浮かぶ。やつもまだとは違う残忍な笑みが。

「…ふう」

一つ息を吐き出し、やはり口元に笑みを浮かべる成実。「コーストを退治するときよりも残酷な笑みを。

愁と雪兎、蒼竜が何とか捕まえた近藤と土方、沖田と山崎をつれて
引き返してきたとき、地面には多くのナイフが突き刺さり、対峙す
る一人の体はお互いの血と血らの血で紅く染まっていた。

「ちえつ。こんだけ相手はさすがに難しいな。ま、良いか」

「逃げんじゃねえ！」

クルリと踵でターンする青年に沖田のバズーカが放たれる。

「聞くわけないだろ」

その声を残して青年は消え、壁には穴があいた。

「なる、大丈夫？」

「…別に」

それだけ言つと、成実は突き刺さつてゐるナイフを一つ一つ拾い、元の場所へと収めていく。

「あいつは何者なんだ？」

「…」

「成実の事、知つてたよな？」

「…」

「答えるー。」

近藤と蒼竜の問いを全て無視して拾い続ける成実に、土方が声を荒げる。

「……の……だ」

「は?」

「俺の……俺の、兄だ」

その場の空気が変わった。

No.9(後書き)

侵入者は成実の兄だつた！？

次回、もう一つ乱入です。

TO Aこと「TALES OF THE ABYSS」から、3人

ほど。

誰かはお楽しみに。

テイルズオブは更に増やそうか思案中です。
でもこれ以上増えると書き分けが出来ない…

途中までですが後ほど最後まであげます

あと少しで夜明けという時間帯。
ドサドサと路地裏に物が落ちる音がある。

「いっただいい！」

「全くです」

「何でもいいが、早く降りてくれないか？」

落ちてきたのはぬいぐるみを背負った少女と眼鏡をかけた男性それ
に腰に刀を下げる青年。

少女と男性は青年の上に落ちたらしく、上の発言に繋がる。

「おや？ 居たのですか？」

「あれ？ 本当だ」

「…あのなあ」

降りつつもからかう様な少女と男性に対し、青年はため息を付きつ
つ立ち上がる。

「少し真面目な話になりますが、ここが何処なのかはつきりさせた
いですね」

「確かにい。大佐、わかりますかあ？」

「……全く見当もつません。見たことのない町並みですし、一人はどうです？」

「ううん……わからないです」

「俺もだ。見たことがないな」

「役に立たない……」

「本当ですね」

「だから、何で俺だけそういう扱いなんだ！」

「まあ？」

「貴方だからですね」

「…………」

散々な扱いをされる青年。

そんな時。

「はうあ……た、大佐！何ですかあれ！」

「わかりますん。ですが、少なくとも友好的ではありますんね」

田の前には狼に剣が生えたような生き物がいる。それも、二匹。

「どうやら、自己防衛をしなければいけなさそうだな

グルルと喉をならし近づくのを見て、青年が刀を抜く。

「全く、骨がおれますね」

男性もどこから取り出したのか、槍を構える。

「早速ぶつ飛ばしちゃうも…はわ…！」

背負つたぬいぐるみを地面に叩きつけた少女はまた驚きの声をあげる

「どうしました？」

「ト、トクナガが！」

彼女の手の中のぬいぐるみは今叩きつけられたことにより少し土がついている。

「仕方がない。アニス、下がつて！」

狼狽える少女の前に男一人が壁のようにたつ。細い路地だったのが幸いして完全に道を塞ぐ。

「さて、行きますか。瞬迅槍！」

「虎牙破斬！」

互いに得物を狼に向け技を叩き込む。
しかし…

「おや？」

「効いてない、か？」

「何でそんなに冷静なの……？」

冷静に咳く男性一人にバシバシとぬいぐるみを叩きながら少女はヒステリックに叫んだ。

「騒いだところでどうなる問題でもありません」

「もうこいつ」とだ。が、困ったな……」

「」の際、ガイを生贊に

「だからなんでいつも俺なんだ……」

ふざけ始めた（？）男一人。その間に狼はどうぞん間合こをつめてくる。

「どこで……」

「よけて……」

不意に合間を縫うように銀髪の少女が現れ上からは白髪の少年が飛び降りて三人の前の壁になる。
言つまでも無く、愁と雪兎である。

「貴方たちは誰ですか？」

「後あと一一下がつて……」

「危険だぞ！」

男二人は少々驚きつつも愁と雪兔に言つ。
もちろん、愁と雪兔は既に起動イグーッションしている。しかし、二人とも装備はヨーヨーだつたり扇だつたり彼らにしてみれば頼りなく見える上、能力者ということを知らない。体格的にも見た目的にも幼い二人。頼りなさ過ぎる。

みただけでは。

「御願い、下がつて？」

振り返つてコクンと首をかしげたる雪兔。しぶしぶながら、男一人も少しだけ下がる。

「わりい」

「…」

「遅いー」

「はわー来るよー」

蒼竜と成実が合流したところで狼は一匹が愁と雪兔、一匹が成実と蒼竜に襲い掛かる。

「…「うざい」、消えろ」

いつも以上に低い声でブツブツ呟きながら、成実は闇をまとった刀を叩きつける。

「童、任せる。…当たれ！」

童に指示を出し愁のほうへ向かわせ、自分は手のひらを雪兎に噛み付けとした狼に向け雑靈を集めた氣の塊を打ち出す。

「いっけえ！…」

飛び下がりざまに作り出した淡い青に輝く矢を自分に飛び掛けてきた狼に放つ愁。

「消えて！」

蒼竜の攻撃により体勢を崩した狼へ向け獸のオーラをまとった一匹を振り壁へと叩きつける雪兎。

叩きつけられた狼はそのまま消滅する。

「残数2」

「何だと…」

「おや？相当ですね」

低い声で呟く成実。

あんまりにも呆気なく消滅した事に驚きを隠せない男一人。

「雪兔は愁に協力！成実、あわせてくれ！」

「わかった！」

「了承」

槍を構えつつ指示を飛ばす蒼竜。それに答える愁の側へ行く雪兔、駆け出す成実。

蒼竜がその槍を振りぬくと狼はそれを避ける。その一瞬の隙に成実は懐へ入り込み手にした刀をクロスさせたまま振るつた。はさみの原理で首を切られた狼は一瞬血を噴くも消滅した。ほぼ同時に愁がもう一匹へ矢を放つと雪兔は三日月の軌跡を描く蹴りを叩き込み狼を消滅させた。

「終了」と

「で、あんたらは?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4174g/>

死と隣り合わせの…

2011年2月23日05時50分発行